
裏組織の少年事情

春華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏組織の少年事情

【Nコード】

N5422W

【作者名】

春華

【あらすじ】

戸籍を持っていない少年たちが所属する組織。その組織に両親を逮捕された、ある少年が入会することになる。両親が逮捕された理由は？

これは、この少年の組織での生活記録である。

プロローグ（前書き）

処女作です。基本文才がないと思います。更新は、不定期です。

もし、よかつたら読んでくださいます。よろしくおねがいします。

ああーどうしよ・・・（汗）きんちょー！！ 暴言など以外のコメント
お願いします！

プロローグ

決して表舞台では活動しない、スパイのような組織が日本の警察に属している。

身体能力は、プロのスポーツ選手並みに高く、どんな状況でも、冷静な判断が下せる、凄腕の者達。しかし、その組織の者達は戸籍も消去されている、表舞台では動けない者達なのだ。これは、そんな彼らの、お話である。

- * - * - * - * - * - * -

今までは、そこそこ幸せだったと思う。

いつものような日常ばかりだったけれど、それでも、それが一番の幸せだったのだろう。

誰かが言った、“人間、人生のうちで幸せと不幸は同じ量だ”と俺は、思えば幸せなことばかりだったと思う。だから、俺は幸せは一気に押し寄せてきて、不幸は少しずつ来るタイプなのだった。だが、違ったようだ。

「ただいま。」

いつもと同じ。ここまではそうだった。でも、家には警察が来ていて、不思議に思ったのは、そこに俺と同じくらいの高校生がいたことだが、そんなことよりも、家に警察がいたことのほうが、俺にはびっくりだった。

「どうしたの？」

声がかすれた。きつと今、俺は素っ頓狂な顔をしているのだろうかと思う。

「……ごめんなさい。」

それだけ言って、両親は去ってしまう。……警察と共に。

ああ、そうか。俺は不幸が少しずつのタイプじゃない。

今までの幸せをかき消すように、不幸が一気にどっと
押し寄せるタイプだ。

場違いにもそう思った。

ブローグ（後書き）

どうでしょうか？読んでくれている人いますか？

誤字脱字など、指摘お願いします！

次はもっと長いはず！（多分・・・）

case 1 (前書き)

はい、二話目です。

今回は長くなるのかな？

・・・なるといいな。では、宜しくお願いします！

case 1

俺は、ただ呆然と連行される両親を見ていた。

「・・・何をしたんだろうね。何かしたのかな。何もしてないのかな。」

「え・・・。」

いきなり声がかかる。誰かと思い、反射的に隣を見ると、さっき見た女の子が立っていた。

呆然としていたから気づかなかったのだろうか？全く気配を感じなかった。

「・・・どうだろうね。」

どうなんだろう。まだ、混乱していて分からなくて・・・。

「ねえ、あなたはこれからどこに行くの？」

「え！ああ、どうしようか。」

これから、そんなことなんか、考えられる余裕なんて無くて、ほんとにどうしよう。

母親も父親も、どちらの祖父祖母もいなくて、頼れる身内なんていなかった。

「このまま、どっかの児童養護施設にでもいくつもり？そしたら、あなたは、犯罪者の子供として、いじめられるのがオチだね。」

「・・・そうだね。」

どうしようか。本当にどうしよう・・・。別に、いじめられてもいいと思ってしまう。でもそれは、俺がこれまで幸せだったから、まわりにいじめというものが無かったからこそ、思うことなのだろうか？

そうして、考えていたら女の子が話しかけてきた。

「・・・ねえ、私たちのところに来ない？」

「・・・え？」

私たちのところ？それは何だろう？

その考えが見えていたように、女の子が話し始めた。

「私たちは、警察の裏組織。戸籍がない、表社会には決して存在しない人たちの属するところよ。あなたが来ることになるなら、あなたの戸籍が消去されるけど・・・どうする？」

* - * - *

- * - * - * - * - * - * -

「・・・裏組織？っていうのは何なの？」

当然の質問だろう。女の子もその質問が来ると思っていたのか、いやな顔をせずに話してくれた。

「・・・それは、その組織に属していない者は知ることが出来ないの。ただ、そうね、スパイ・・・みたいなものかしら？」

「スパイか・・・。くくっ」

急に笑い出した俺を、女の子は不思議そうに見ていた。何だこいつ、とでも言わんばかりに。

「ああ、ごめん・・・。そんな組織が日本に・・・そんな夢みたいな組織があるんだあつて、思ったらちよつと面白くなったんだよ。」

まるで、悪い夢でも見ているようだ。・・・そう思った。・・・そうであつてほしいと、思った。

「ああ・・・そうね。長い間いるから慣れてしまったけれど・・・。そういうものね。・・・ねえ、まさか、信じてないの？裏組織のこと・・・。」

心外だ、とでも言うような顔で俺を見ている。

「ああ、普通は信じないだろうな。でも・・・今はどうでもいいかな。例えば、これが詐欺で、このままあんたについて行つて、入会金はらえ、とか言われても、今ならいいかな。まだ許せるんだ。」

「・・・それは、そうかもね。でも・・・」

女の子が困ったように俺を見る。どうしたら説得できるか、そうい

う顔だ。

「安心しろよ。信じてるさ。あんたたちのことも、裏組織に関しても。……そうだな。入りたいよ、その裏組織に。入れてくれる？」

女の子は、俺を哀れむように見て、

「ええ。大丈夫。」

そう言った。

この日が俺の、新庄 正樹の命日となった。

c a s e 1 (後書き)

どうでしょう?やっぱり、短いですね・・・。

すいませ〜ん!ほんととすいません。

長い話を書ける人に憧れます・・・。

case 2 (前書き)

うーん……。長い話を書けません！多分、case 1 が最長かと……。

……。精進します。がんばるぞー！！

では、宜しく願いします！ぜひ読んでください！

case 2

「でも、よかった。」

女の子が言う。何がだろうと思った。

不思議そうに顔を傾けると、女の子がニコツと笑っている。

「あなたがこの誘いを断ったら、私はあなたを、警察署に連行しなければならなかったし。」

そんなこと笑顔でいうことだろうか・・・。

ちなみに今、俺たちはその組織の、いわゆる秘密基地に向かって歩いている。

「なあ、それって、無実だろ？そんなんで、つかまるところだったのか、俺・・・。」

「うん。そういうもの。身内がいる者には、さっきのような勧誘はしないんだけど、逮捕されたことによつて、身内が全くいなくなってしまう人には、正樹君のように、勧誘はするんだけど・・・、この組織のことは、この国のトップシークレットで、一般人には知られる訳にはいかないの。だから、勧誘に失敗したら、無実でも、適当な罪で逮捕。一生監視がつくか、ずっと牢屋で過ごすか、最悪死刑、なんていう判決が待っている。実際、そういう人が何人もいるしね・・・。」

そんな、説明を女の子がした。断らなくて良かったと、心から思う。

そして、その説明をよく考えてみる。すると、不思議・・・というか、違和感に気づく。

「・・・ねえ、あのさ。俺、君に名前教えたわけ？っていうか、何で身内がいなくなることまでしててる？」

すると、女の子はニコツと笑って、

「そりゃ、事前に与えられた情報で知ってるんだよ。新庄 正樹くん。」

警察の情報すごっ！・・・と本気で思った。

そんなことを話しながら歩いてみると、今、自分がビルの階段を上っていることに気づく。

「なあ、どこに行くの？」

その質問の意味に気づいたのか、女の子が、

「ああ、裏組織の秘密基地はここから、少し離れたところにあるの。だから、ヘリで向かうのよ。」

「ふうん。」

しばらくすると、ボオという、ヘリの音が聞こえた。

ヘリに乗り込むと、女の子が改まった顔で「さて」といった。

「じゃあ、これから裏組織のことについて詳しく話すね。もう一度確認するけど、ほんとに入るのね。このことを話した後で、やっぱやめます。とか言わないでね。」

「ああ。」

どうせ、行くところも無いし……。は言わないでおく。

「それに、やめる、なんて言ったら、さっきの判決の三択が待っているんだろ？」

「はは、よく分かったね。うん。……じゃ、説明するね。まず、訂正。さっきスパイみたいなものって言ったけど、実際は暗殺者の方に近いかな？ 私たちは、極悪人や国のお偉いさんに関わった、表に出せない事件の犯人を捕まえるのが仕事。っていつても、私たちは事件を推理したりはしないわ。することは、警察の上の方の人が捕まえるって言った人たちを、誰にばれることなく捕まえること。だから、……例えば、その事件の犯人じゃない人を捕まえたり、無理やり大事にした事件の犯人をつかまえたりすることも、あるのよ。」

「な！」

思わず、短い叫び声をあげた。何だそれは。あんまりにも理不尽じゃないか。だが……、

「でも、逆らえないよな。それであんたたちは、食っていけるんだから……。」

すると、女の子は自嘲じみた笑みを浮かべる。女の子は、俺の言ったことには答えず、説明を続けた。

「・・・だから、私たちに求められるのは、気配を消せること、決して反抗しないこと、冷静な判断を下せること。じゃなきゃ、私たちは生きれない。・・・覚えておいてね。」

「ああ。」

戸籍が無い。というより、死んだことになるのだ。もう表では生きられない。だから、はむかうことなんて、できないんだ。俺も、馬鹿ではない。生きることには必死だから、絶対はむかわないと、決めた。

「ああ、もうすぐ着くよ。秘密基地に。じゃあ、改めて、私は辰野 美恵。これから、よろしくね。」

「・・・ああ、よろしく。」

これで、もう、俺は表では生きられない。そう思った。

case 2 (後書き)

これ、どうなんでしょう？ case 1より長いですが？
でも、今回は区切りがありません。読みづらいですね・・・。

いやーもう、文才ない時点で読みづらいんですけどね！

次も、宜しくお願いします！

case3 (前書き)

ああー、文才がちよーほしいです・・・。

何なんでしょう？何でしょうね・・・。

はあー・・・。まあ、ぐだぐだですけど、読んでください！

case 3

「ここが、裏組織の秘密基地だよ。」

そういつて、前で両手を広げて説明する。

裏組織の秘密基地といわれる場所は・・・、一言で言うと、でかかった。というより、どこの豪邸だ！と叫びたくなるほど、豪華だ。裏組織なのにこんなに・・・、

「目立っていいのか？・・・じゃない？」

自分の思っていたことが、言葉にだされて、ドキつとした。そんな俺を、辰野はくすくす笑って見ている。

「例えばさ、人間って、怪しければ怪しいほど、観察して見たい、中に入って見たいって思うものじゃない？・・・まあ、逆の人もいるだろうけど・・・。でもさ、なんか煌びやかで、豪華だったら、少しはいりにくい感じがしない？」

うーん・・・まあ、そうかも・・・とよく考えれば思う。

「まあ、でも安心してよ。中はこんな豪華な外見とは裏腹に、トレーニングルームとか、あるから。」

「はぁ・・・。」

安心できることなのか？と思ったが・・・、まあ気にしない。

「さて、この秘密基地の案内を・・・、いたっ！」

突然、目の前に二十代前半の女が現れた。その女は、持っていたファイルで、辰野の頭を軽く叩き、

「お前なあ、いつになったら覚えるんだ！ここは秘密基地じゃない！警察特殊機密部隊の総集所だ！」

と、怒鳴り声を上げた。

「うう・・・、相変わらず、向井はうるさいなあ。ああ、正樹君。この人は向井 龍葉さん。裏組織・・・じゃなくて、警察特殊機密部隊の指導員だよ。」

「ああ、こいつが・・・。よかった。勧誘は成功したんだな。」

そう言つて、向井さんは優しい顔で俺を見た。

「ああ・・・えっと、新庄 正樹です。これから、宜しく願ひします。」

そういつて、俺はペコツと頭を下げた。すると、上からくしゃくしゃつと頭をなでる手を感じた。

「おう！宜しくな！これから、ビシバシしごくから覚悟しろよ！」

頭を上げると、向井さんが、ニカツと笑っていた。多分、厳しい人なんだろうけど、優しい人なんだろうなと思った。

「じゃあ、案内するよ。辰野はまだ、仕事があるだろう？案内は私に任せて、さつさと済ませろ！」

そう、向井さんが言つと、辰野はつまらなそうに、

「ええー！・・・任務完了の書類書くのつてつまんだよ・・・まあ、いいや。じゃあね、正樹君。また後で！」

そう言つと、辰野は走つて、その豪邸に・・・もとい総集所に向かった。その時、俺とすれ違う時に、ボソツと、

「向井はいい人だよ。だから大丈夫。安心しなさい！」

と言つた。それに俺も、ぼそつと、

「うん。そうだと思う。」

と言つ。すると、辰野はニコつと笑つて、

「じゃあねー！」

と言つて、見えなくなつた。

「よし、じゃあ案内する。ついて来い！」

* -

- * - * - * - * - * - * - * -

総集所の中は、なんというか、トレーニングルームがついている質素だけど豪華なホテルみたいな感じだった。全三階立てで、一階

はトレーニングルーム、売店、風呂、休憩所、ランドリー、食堂があり、二階から三階は各個人の部屋のようだ。一階はどの階に比べてもすごく大きかった。

そこそこ案内が終わった後、向井さんが重たく口を開いた。

「なあ、何でこんなに総集所が充実してるか分かるか？」

俺も、不思議に思っていた。だが、案内してもらっている間、辰野に言われたことを、一個一個思い出していた。

・戸籍がない者達が集まるところ。

・知られたら、無実でも、最悪死刑。

これらのことを考えてしまえば、答えは明確だ。

「もう、表では生きていけないから・・・、外に出れないからですか？」

そう言うのと、向井さんは曇った表情をした。けれど、そのことに関して、俺は大して不便に思っていない。だから、

「大丈夫です。いろいろ話を聞いていましたから。・・・何となくそんな感じだろうと思っていました。あんまり、それを不便とは思いません。それは、俺が今まで幸せだったから、覚悟のそこって言う、俺の表現で言ったら、皆さんとは比べ物にならない位浅いんだろうけど、でも、そんなものでも、きちんと覚悟しましたから。・・・だから、大丈夫。向井さんが思っているほど、俺は不幸ではないです。」

すると、向井さんは曇っているながらも、少し明るい顔をした。

「・・・おう！それでこそ、男だ。」

また、向井さんは頭をくしゃくしゃとなでた。俺は、きっと嬉しい顔をしていたはずだ。だって、すごく嬉しかったから。

「よし、じゃあさっそく、明日からトレーニングだ。お前はまだ新人だから、いきなり仕事は荷が重いし、失敗しかねん。とりあえず、気配をさせるようになることだ！お前は、冷静な判断は少し教えれば、すぐ出来るようになるだろう。」

「ありがとうございます！」

「じゃあ、さっそく明日からこのトレーニングメニューをこなしてもらおうぞ!」

俺は、その練習メニューを見たとき、絶句する。

風呂、食事、睡眠は一日で七時間。つまり、それ以外の十七時間は、トレーニング。休憩なし。

「頑張れ! 応援してるぞ! 指導員は誰になるかは分からんけどな!」
「・・・はい。」

―俺はこのとき初めて、この組織に入ったことを後悔した。

c a s e 3 (後書き)

はあー。タイピングも早くなりたいです。

・・・頑張ります。

次回も宜しくですー！

case 4 (前書き)

面白い話を書きたいなーと思う、今日この頃。

今回は新キャラが2人出てきます。そろそろ、混乱してきました。
あとがきでまとめます。

では、宜しくお願いします。

case 4

「はぁー……。あれ、ここって……。」

太陽の光が顔に強く当たって、目が覚める。しかし、いつもと違い部屋が質素で何も無く、倍くらいの大きさに感じた。そして、すぐに思い出す。

「……。そっか。」

そう言つて、少し、暗い気持ちになる。でも、別に死ぬわけではないのだ。また、会える……。

「そういえば、今日からトレーニングが始まるはず……。」

そして、悪夢のトレーニングメニューを思い出し、さっきとは違う暗い気持ちになる……。

「……。とりあえず、昨日案内してもらった、トレーニングルーム行くか……。」

と、少々ずーんとした気持ちで、一階に向かう。時間を見ると、まだ六時少し前だった。

「まだ、早いか……?」

とも思つたが、早く行くことに越したことは無いと思い、行くことにした。

部屋を出ると、隣の部屋の人も出てきたようだ。やはり、俺と同じくらいで、高校生くらい。色素の薄い、男にしては少々長いくらいの髪に、長身痩躯。優しそうな顔をしていた。

「あれ、君、新入り?」

その人が、話かけてきた。

「あ、はい! 昨日入りました、新庄 正樹です。」

「ふうん。年は?」

「あ、十七です。」

「あ、じゃあ、俺と変わんないよ。俺のほうがいっこ上なだけだ。だから、敬語じゃなくて、タメ語でいいよ。俺は道信 文也。よろ

しく。」

道信 文也と名乗った人は、優しそうな、大人な感じの人だ。

「……よろしく。道信。」

ここは、優しい人が多いなと思う。けれどやっぱり、何か暗い過去があるんじゃないか、と思う。優しいのは、その過去を悟られないようになんじゃないかと、思う。

「なな、ところでさ、正樹って辰野さんと一緒に来たんだろ？」

「……？ああ。そうだが……。」

「俺はあんまり興味ないんだが……、あの子、この組織で結構人気なんだよ。お前、恨まれるかもな。」

そう言つて、道信は楽しそうに、いたずらっぽく笑った。

「あんまり、不吉なこと言ふなよ……、道信。」

だが、そうなのか？と思った。あの時、俺はなかなかショックであり、顔なんて見ていなかった。

そういうときに限って、

「あれ、正樹君と道信？おはよう。もう仲良くなったの？」

噂をすれば、本人登場。

「おはよう、辰野。」

「おはよう。辰野さん。」

俺と、道信は挨拶を返した。そう言いながら、辰野を試みる。

確かに、もてそうな顔だ。そこそこ長い髪を後ろでひとつでしばって、大きな目をしている。目鼻立ちも整っていて、こんな職業のためか、痩せていた。

「聞いたよ、正樹君。今日からトレーニングなんだって？大変だね。」

「ああ。」

「指導員は向井じゃないみたいだよ。さっき向井がそう言ってた。それでね、向井からの伝言。朝飯食ってから、トレーニングルームに來い、だって。」

どうやら、指導員は向井さんでは、ないみたいだ。少し、残念だ。

「ありがとう。」

「じゃ、一緒に、食堂行こう。」

そう言つて、辰野は歩き始めた。

「なんだ。結構仲がいいんだな。」

「そうか？・・・まあ、別に俺は人見知りするタイプじゃないし。」

「どうだ？辰野さんかわいいだろ？」

そう、にやにや笑いながら言う。

「ああ、かわいいかもな。」

そう言つと、なぜか道信は残念そうな顔をした。

「はあ、何かつまらない反応だな。」

「うーん。・・・何か俺、色恋沙汰に興味が無いみたいなんだよな。」

「ふうん・・・。」

それから、食堂に着く。食堂も質素ながらも豪華で、どのメニューもおおいそうだった。実際、俺が食べた料理は文句なし。

「さて、トレーニングルームに行くか・・・。」

そう言つて、俺はトレーニングルームに向かった。

- * - * -

- * - * - * - * - * - * - * - *

「おはようございます。これから、君の指導員になります、狩下満と言います。よろしく。」

どうやら、俺の指導員は狩下さんになるようだ。あまり、強そうとは言えない、礼儀正しい紳士だ。短く、少し青みがかつた色の髪に、いつもニコニコしている顔。あまり身長は高くなく、ひよろつとしている。

「宜しくお願いします。新庄 正樹です。」

「はい。では、僕から覚えていて欲しいことを言います。覚えて

ください。まず、僕たちに必要なのは、ずば抜けた運動能力・・・というよりも、気配を完璧に消せるかどうかです。そして、相手に情けをかけないこと。最後のは難しいですね。僕も、正直に言って無理です。けれど、それを行動に見せないでください。絶対です。でなければ、私たちは生きられない。私たちに求められているのは、任務成功の四文字だけです。」

そう言った。ああ、この人もいい人だと思う。きっと、言うのがつらいのに、一生懸命俺にそれを伝えようとしている。

「はい。・・・ここは、いい人がいっぱいですね。多分、表よりもきつと多い。考え方が浅いのは十分承知なのですが、そう思います。」

すると、狩下さんは少しびっくりした顔をした。その後に、にこつと笑って、

「なら、君も優しいのでしょう。・・・類は友を呼ぶと言うのですから。」

俺は、その言葉に戸惑って、

「・・・そうだと、いいですね。」
と言った。

「では、早速訓練に入ります。訓練は彼と一緒に行ってもらいます。」

すると、奥から少年が現れる。つり上がってきつい目に、オレンジ色の髪。多分中学生くらいだ。身長はまだ、少し小さい。

「彼は、鵜矢 李男君。人の気配を敏感に感じる体質の子なんです。彼に気づかれないよう、気配を消し、彼の背後に近づいてください。すばやくです。では、はじめましょう。」

「宜しく。」

「・・・。」

俺は鵜矢君に挨拶したが、鵜矢くんは無視をした。

嫌われてるのかな？そう思ったが、まだ中学生。難しい年頃なんだろう。そう思い、大して気にしなかった。

「はい。始め」
狩下さんの合図がかかった。

「この場所に残るため、頑張ろうと思った。」

case 4 (後書き)

登場人物

新庄

正樹

辰野

美恵

向井

龍葉

道信

文也

狩下

満

鵜矢

李男

男

男

男

女

女

男

男 男 男 女 女 男

1 1 1 1 1 1
5 6 8 7 5 7
9 0 2 6 7 0
c c c c c c
m m m m m m

1 2 1 2 1 1
4 8 8 7 6 7
歳 歳 歳 歳 歳 歳

・
・
・
・
・
以上

です。

ありがとうございました！

case 5 (前書き)

向井と狩下の年齢を変えました。よかったら、前の話のあとがきを
読んでください。

それと・・・更新遅れてすいません。精進します。

では、どうぞ読んでください！

case 5

俺は今、気配を消す訓練中。状況は・・・、

「やはり、一日では難しいですね。」

と、この通り。

「はあ・・・、はあ・・・、すごいですね、鵜矢君。」

「ええ、彼はすごいです。」

そう、俺は今、鵜矢君と気配を消す訓練をしているのだが、彼はとにかくすごかった。

訓練内容は、まず、鵜矢君が俺との距離が百メートルの地点に、目隠しをしている。俺は、とにかく鵜矢君に近づいてタッチする。だが、近づいている途中で鵜矢君が俺の気配に気づいたら、目隠しをしたまま、鵜矢君は俺から離れる。ただし、鵜矢君が離れていいのは俺が半径十メートル以内にいると分かったときだけ。と、いう内容だ。

それを俺は、ことごとくかわされ、一回もタッチ出来ていない。

初めは、もしかして鵜矢君は適当に動いているだけなんじゃないかって思っていたけれど、それが顔に出ていたのか、狩下さんが、「適当にかわしているというのはありませんよ？彼にメリットがありませんからね。」

と、言われた。

つまり、あまりいい結果は出せていないということだ。

そして、改めて思うこと。

「ほんとにすごいな・・・。鵜矢君。」

ぼそつと言った。すると、聞こえたのか狩下さんが、

「ええ、本当にすごいです。彼は。私も彼に気配を消して近づけと言われたら、そこそ難いですからね。」

それを、俺がやるにはどうしたらいいんだ？と、軽く途方に暮れた。

「まあ、でも、今日一日でやれという訳ではありませんので、と

りあえず、あと二時間頑張つて、また明日も頑張りますよ。」

「そうですね……。はい。頑張ります。」

そう、ここ以外ではもう生きていけない俺は、とにかく頑張るしかないんだ。

その後も、結果はあまり芳しくなく、今日の訓練は終わりを告げた。

俺は、トレーニングルームからそのまま食堂で食事を取り、風呂に入り、自分の部屋に戻ろうと、階段に向かった。

しかし、その途中の休憩所で鵜矢君を見つける。

「こんばんわ。鵜矢君。」

無視もどうかと思い、声をかける。しかし、声をかけたからには、何か話さなくてはならない訳で……。

何話そう……。と、悩んでいたときに鵜矢君が声をかけてくれた。

「あんたは、自分のこと可哀相だと思ってる？」

まだ、声変わりの終わっていない、不思議な声だ。

「……。どうだろ。鵜矢君から見たらどう見える？」

と、質問をした。それに、鵜矢君は少し悩んで、

「……思っていない、と思う。」

と、言った。

「ここに来る奴は皆そうなんだ。暗い顔をして入ってきて、俺は可哀相ですと皆にアピールする。悲劇のヒーロー面する。」

「ふん。つまり、鵜矢君はそういうヒーロー面した奴が気に食わないと？」

そういうと、鵜矢君はコクンと頭を下げる。多分、そうだという意味だろう。

「俺も、案外そうかもね。でも、鵜矢君が思っていないと言ってくれるんなら、思っていないんだろ。」

「どういう意味？」

鵜矢君は怪訝な顔をして尋ねてくる。

「客観的に見て、そう思ったんなら、そうなんだろう。・・・俺は、いつだって第三者の目で物事を見つめるんだ。その物事に、家族や友達や仲間が関わっていても、それを変えるつもりは無い。」

「あんだ、なんだか人付き合いが悪そうだ。」

鵜矢君は、そう言った。けれど、俺は笑って、

「そんなことないよ。自分も第三者の目で見る為には、どうしても他人が居ないといけない。だから、人付き合いは悪くないほうだと思ってるけどね。」

「・・・ふうん。」

「だから、俺は両親が逮捕されたとき、確かにショックだったけど、今は冷静にね、考えてるよ。」

それは、本当のことだ。いつまでも落ち込んでいるようじゃ、前に進めない。

「・・・明日も早いんだろ。俺はもう寝る。」

そう言っで、いきなり鵜矢君は立ち上がった。

「あ、最後にひとつ聞いていい？」

俺がそういうと、鵜矢君はピタツと立ち止まる。それが了承と考え、聞いてみたかったことを言う。

「どうやったら、気配を消せるの？」

すると、鵜矢君は少しだけこっちに振り返り、

「人間だと思わないこと。」

とだけ言っで、また歩き出してしまった。

そして、俺は考える。

「人間だと、思わないこと？」

どういう意味だろう・・・。

その後しばらく考えて、なんとなくの意味が分かった頃には、もう夜中だった。

「・・・俺も寝るか。」

そう考えて、俺は、二階へ向かった。

- * -

- * - * - * - * - * - * - * - *

「人間だと思わないこと。」

そう言われたのを、俺なりに考えた結果は、気配がある物だと思わないこと、だ。

それを、訓練中いつも頭に思い浮かべてやっていたら、ある日・・。

「すごいですね。一週間で彼に三メートルも近づけるなんて。」

そう、俺は鷓矢君の半径三メートルまで近づけたのだ。

「これなら、もう小さい任務なら出来るかも知れません。」

「本当ですか！」

あと、少しで任務がこなせる、というところまでいったのだ。

「でも、俺まだ鷓矢君にタッチできてないんですが・・。」

「ああ、それなら大丈夫。彼は人より何倍も気配を感じることが出来るんです。その鷓矢君に三メートルも近づけたんなら、一般人は新庄君の気配は感じられないはずです。」

そう、狩下さんに言われた。

ともかくも、まあ鷓矢君にこれだけ近づけたのも鷓矢君のおかげな訳で・・。だから、お礼をしようと、訓練中の鷓矢君に話しかけた。だが、

「ありがと。鷓矢君。」

「・・・別に。」

と、あっさりかわされてしまったが、まあよしとする。

と、そこで狩下さんに話しかけられた。

「へえ、あの鷓矢君が何か君に助言をしたんですか？」

何故か、狩下さんは驚いた顔をしていた。

「ええ、『人間だと思わないこと。』と・・。」

「へえ、良かったですね。鵜矢君に気に入られる人なんて滅多に居ないんですよ。」

へえ・・・、と思ったが、まあ無口なところを見るとそうだろうなあと思って思った。

「俺、気に入られたのか。」

それは、素直に嬉しいことだった。

その後も、平均して大体三メートルくらいで気づかれてしまった。そして、訓練が終わり、いつものようにそのまま食堂、風呂と行って、自分の部屋に戻るため、二階にあがった。

すると、部屋の前で向井さんと辰野が待っていた。

「こんばんわ。正樹君聞いたよ、李男君に気配を悟られず三メートルも近づいたんだって？」

何で知ってるんだ？と思ったが、あまり気にしない。

「さて、本題に移る。今から一カ月後に任務を開始する。トレーニングパートナーと、任務パートナーがそれぞれにいるんだが、大体どんなもんか分かるな？」

と、向井さんは聞いた。まあ、こんな分かりやすい名前なら分かるだろう。俺はコクつと頷いた。

「初任務はどんなだろうと、少し考える。」

case 5 (後書き)

終わりが微妙ですね。でも、これ以上続けると、ありえない長さになってしまうので、ご了承ください。

パートナーは次回発表です。

読んでくださりありがとうございます！

お知らせ

こんにちは。 大分遅れてすいません。

実はこれ、なんの考えもなしに創った作品なんですよ。だから、これからもう一度構造を作り直して、一話目から投稿しなおしたいと思います。

うゝん・・・そんなにかかんないと思うんですが・・・。

そうですね、土曜には投稿できればと思います。

こんな作品をこれからも宜しく願います。

春華

それでは、少し練ってる構想のプロローグを流します。
これは、もう一回投稿すると思います。

題名『母の名をかたる少女』

例えば、今日の朝まで普通だった。・・・としても、帰ってきたときは地獄だった。

そんなことを、朝少しでも考えただろうか。

答えはNO。そんなことを考える人間がこの世のどこにいるだろうか。そんなことを考えられるのは、予知の力がある、特定の人物だけだ。

私はもちろんそんな力は無かった。当然だろう、一般家庭に生まれ育ったのだから。

「・・・お母さん？」

いつも通りの時間に、いつも通りに帰ってきた家にはいつもとは違う風景。

お母さんは血まみれで倒れていた。

その時、私取るべき行動はなんだろう？普通は、冷静ならば救急車を呼ぶとか、警察を呼ぶとかだろうか。けれど、私はただ、呆然とその光景を見ていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5422w/>

裏組織の少年事情

2012年1月10日23時50分発行